中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第15号(2014) 35-40

研 究 論 文

ハンドベル演奏体験による自己変容について

Self-Alteration in College Student by Ringing on Handbells

岡　田　泰　子*
Yasuko　OKADA

抄録：本研究はハンドベル演奏体験と学生の自己評価および自己変容への関連性を明らかにすることを目的とした。保育士、幼稚園教諭養成課程２年次学生を対象とし、ハンドベル演奏体験後に調査を行った。調査内容は①自己評価に関する限定的な質問、および②自己変容に関する自由記述とした。①について、「集中力」「協調性」「責任感」「音楽的能力」各項目において自己評価が向上した。②について「ハンドベルの技能」「音楽的技能」「身体的能力」「他者への配慮」また「音楽的な興味関心」「自分の行動特性」の変容を挙げる学生が多くみられた。また、これらの変容を促した要因を検討したところ、ハンドベルに特有の教育成果と考えられるものもみられた。

キーワード：ハンドベル、自己変容、大学生、行動特性、自己評価

１．はじめに

イングリッシュ・ハンドベル（以降、ハンドベル）は、400年以上も前に、教会のタワーベルの練習用に、手で鳴らすことができるようにとの願いから、イギリスで生まれた。近年のハンドベルの普及は目覚ましく、アメリカ、イギリス、カナダ、日本などでも盛んに演奏されるようになった。ハンドベルの音色は「天使のハーモニー」と呼ばれるほど優美で清澄な響き故に、その愛好者が次第に増えている[1)]。

下田(1995)は「ハンドベルはそれを演奏するにあたり、個人差や能力差を越えて、所属意識や仲間意識、相互尊重、相互依存、チームワーク（協調、責任、奉仕、共感、創意工夫など）の重要性が問われる」と述べている[2)]。また、佐藤(1999)は「ハンドベルが受け入れられたのは、この楽器が最も自分の存在を確認できると実感されたからであろう」と述べている[3)]。

中部学院大学・中部学院大学短期大学部では学生の音楽教育の一環として，1984年よりハンドベルの演奏を授業やサークル活動の中心に行ってきた。筆者は1992年から現在に至るまで指揮者として携わってきた。活動内容は、入学式・卒業式・クリスマス礼拝などの学内行事、また日本ハンドベル連盟主催全国フェスティバルや中部フェスティバルへの参加及びクリスマスシーズンを中心とした各種施設のイベントへの参加依頼など、演奏活動は通算200回超である。また現在は本学卒業生で構成された演奏団体が２つも結成されるなど、活動の輪を広げてきた。さらに、2012年度より幼児教育学科「総合表現活動」の授業科目に位置付け、多くの学生がハンドベルの演奏を体験できる機会を提供している。

このように「ハンドベル」が社会性や音楽性を育む特有の楽器であることからも、本学のみならず、幼稚園から大学まで宗教的背景をもつ教育機関を中心に、若年層がハンドベル演奏活動を行う場が増加している。しかしながら、ハンドベル演奏がもたらす教育効果に関する検討は十分ではない。そこで本研究ではハンドベル演奏体験による学生の教育効果の一環として自己変容について検討することにした。

２．研究１

（１）目的

ハンドベル演奏の体験の集中力、協調性、責任感、音楽的能力への反映について検討することにした。

（２）方法

協力者　2012年度の総合表現活動において、ハンドベル演奏を2012年４月から2013年１月の約10か月間体験した本学幼児教育学科２年生47名(女子)とした。

調査内容　調査は自記式とし、①集中力　②協調性　③責任感　④音楽的能力の４項目について５件法で自己評価し、その理由を記述させた。

調査期日　調査は2013年２月５日に行った。

倫理的配慮　調査に関して、事前に学生の参加自由意思を確認した。参加は任意に中止できること、また、中止した際も参加者に不利益が生じないことを事前に説明した。

＊短期大学部幼児教育学科

表１　学生の自己評価(n=42)

	大いにそう思う	そう思う	わからない	そう思わない	全くそう思わない
集中力が身についた	23(54.8)	18(42.9)	1(2.3)	0	0
協調性が身についた	24(57.1)	15(35.7)	3(7.2)	0	0
責任感が身についた	28(66.7)	12(28.6)	2(4.7)	0	0
音楽的能力が身についた	20(40.6)	16(38.1)	6(14.3)	0	0

人数(%)

（３）結果と考察

記載不備５名を除き、42名を分析の対象とした。ハンドベル演奏体験後、協力者が調査項目について行った自己評価の結果を表１に示した。ハンドベル演奏指導を受けた殆ど全ての学生が、「集中力」、「協調性」「責任感」及び「音楽的能力」が身についたかという質問に対して、「大いにそう思う」、「そう思う」と回答した。「集中力が身についた」という理由に、「自分の音がならないと曲が成り立たない」や「一音のタイミングをあわせることが大切」というハンドベルの特性を示す記述や、「長時間集中出来た」、「ハンドベルの時間はハンドベルのことしか考えていなかった」などハンドベル演奏に取り組む自分の姿勢に関する記述もあった。さらには、「皆で合わせられるようにするために」、「１つのものを作り上げることが楽しかったから」、「自分のミスで周りに迷惑をかけないようにと思った」、「全員で集中しないと良い曲が出来ないということを学んだので」、「一回一回の演奏で周りと合わせようと出来たから」、「皆が集中力を持ってやっていたのが伝わったから、私も頑張ろうと思った」などの仲間との関わりが感じられた記述、また「真剣にやらなければ」、「練習から本番を意識して取り組むことが出来た」、「出来たことの喜びを知れたから」、「集中することで、何でも頑張れることを学んだから」、「一音一音大切にするようになった」などの学生自身の達成感や自己の成長が感じられる記述もみられた。上記の記述は佐藤(1999)が述べた「この楽器が最も自分の存在を確認できる」に通ずると考えられる。また、「協調性」に関しては、「一体となって曲を作りあげることに全員で取り組もうという意識を持てた」、「皆で心を合わせて音楽を作ることができた」、「皆のおかげで協力出来た」、「チームワークが出来た」、「決してひとりでは出来ないことだから」、「友達と準備、片づけを分担し、音を聴き合って改善することが出来た」、「皆で頑張ろうと意気込んでいた」、「全体のバランスを保つには周りとの協調性が必要」、などの記述があった。「責任感」に関しては、「休んだら迷惑がかかる」、「一人ひとり音を持つことによって身についた」、「片づけや準備を含め、一員として出席できた」、「コンサートを成功しなくてはいけない」、「一人でも欠けたら曲が成り立たないと意識を持てた」、「自分の音の大切さを理解し、鳴らすことが出来た」などの記述があった。「音楽的能力」に関しては、「メロディーかそうでないか考えるようになった」、「ベルを鳴らしながら楽譜を追うようになった」、「好きだった音楽がもっと好きになった」、「滅多に出来ない経験、大人数でつくりあげる音楽を体感出来たから」、「リズムがすぐ分かるようになった」、「ハンドベルの色々な鳴らし方を知ることが出来た」などの記述がみられた。以上のように、ハンドベル体験により学生自身が自己の変化について気づき、指導者側の意図する教育目標に近づいたといえるが、今回の調査では、「集中力」「協調性」「責任感」「音楽的能力」の４項目のみに限定された結果であった。そこで、４項目に限定しないで調査する必要があると考えた。

３．研究２

（１）目的

研究１で実施した調査では調査項目を設定したため、調査協力者がハンドベル演奏体験によってもたらされた影響が限定的になった。そこで本研究では、演奏体験がもたらす影響を多面的に調べるために協力者に演奏体験により自分がどのように変化したかについて自由に記述させることにした。

（２）方法

協力者　2013年度の総合表現活動において、ハンドベル演奏を行ってきた（2013年10月24日現在）本学幼児教育学科２年生47名(男子６名、女子41名)に調査を依頼した。

調査内容　調査は自記式とし、以下の２点について記述を依頼した。①ハンドベル演奏を通して、自分が変わったとみられる点を５つ挙げて、それらについて説明させた。②ハンドベル演奏の参加の継続の有無と、その理由を述べさせた。

調査期日　調査は２回に渡って行った。１回目はハンドベル演奏体験の比較的早期である2013年５月30日に実施した。２回目は例年の指導経験から演奏活動が比較的軌道に乗るとみられるほぼ６か月後に相当する

2013年10月24日に実施した。

倫理的配慮　この調査に関して、事前に学生の参加自由意思を確認した。参加は任意に中止出来ること、また、中止した際も参加者に不利益が生じないことを事前に説明した。

（3）結果と考察

ハンドベル演奏体験により学生自身の自己の変化を評価する項目の抽出

記載不備の６名を除く41名の記述を分析対象にした。調査内容①のハンドベル演奏を通して学生自身が変化したとみられる点について２回記述させた文章から、キーワードとみなされる言葉を選び出し、KJ 法を用いて整理し、その結果を表２に示した。

表に示すように選び出したキーワードは、「ハンドベル演奏技能」、「音楽的技能」、「音楽的な興味･関心」、「身体的能力」、「自分の行動特性」、「他者への配慮」の６つ項目に分類できた。「ハンドベル演奏技法」は「ハンドベル」もしくは「ベル」という固有名詞について記述されたキーワード、「音楽的技能」は楽譜を読み取るために必要な、知識や音楽的能力に関連するキーワード、「音楽的な興味･関心」は音楽自体に対する興味･関心に関するキーワード、「身体的能力」は姿勢や筋力などの身体に関するキーワード、「自分の行動特性」は集中力や自信などに関するキーワード、「他者への配慮」は自分以外の人との関係に注意を払うことに関連するキーワードである。

研究１では、「集中力」、「協調性」、「責任感」、「音楽的能力」に限定して演奏体験の影響を体験者である学生自身に評価させた。研究１で用いた４つの評価項目のうち「集中力」、「協調性」及び「責任感」は研究２で示された「自分の行動特性」に該当し、「音楽的能力」は研究２の「音楽的技能」または「ハンドベルの演奏技能」に該当すると考えられる。したがって研究１での自

表２　KJ 法によるキーワードの分類

KJ 法による分類	自分が変わったとみられる自由記述から抽出されたキーワード
ハンドベルの技能	楽器を知る・楽しさ・面白さ・難しさ・癒される・澄んだ音色
音楽的技能	読譜力・リズム感・音感・初見能力・タイミング
音楽的な興味・関心	クラシックへの興味・楽しさ・音の大切さ・聴く力
身体的能力	筋肉・腕力・姿勢・動き・立ちっぱなし・筋力
自分の行動特性	集中力・責任感・自信・物を大切にする・忘れ物をしない・けじめ・時間を守る・真剣さ・指揮を見る・頑張る・暗記
他者への配慮	協調性・周りを見る・団結力・協力・仲間・皆・指揮者・相談・グループ・相手

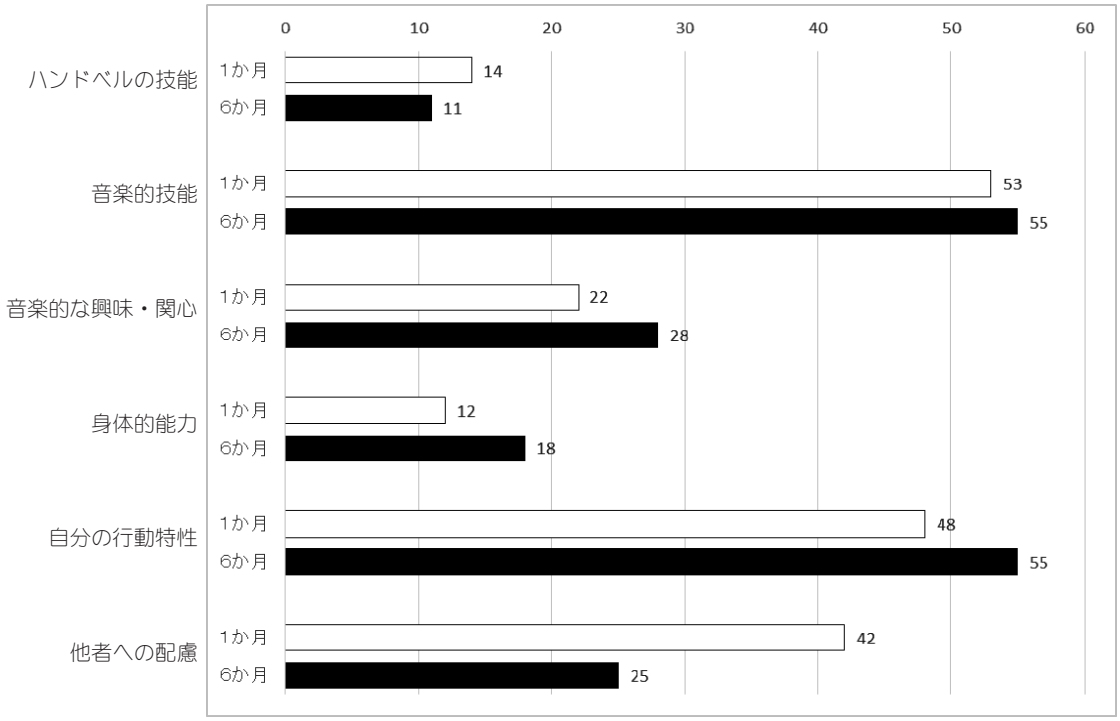

図１　ハンドベル演奏体験の時間経過に伴う各項目別キーワード総数
図中の数字はキーワード総数，１か月及び６か月は演奏体験期間，左は評価項目名を示す。

己評価は学生に自由に評価させた研究２の半分程度と、かなり限られた評価であったことが分かった。

ハンドベル演奏体験による学生の主観的な自己変容について

図１は、ハンドベル演奏体験早期の１回目の各項目別キーワード総数と、演奏が起動に乗ったとみられる６か月後の２回目のキーワード総数を示した。

総数とは分析対象者41名のキーワードを該当する評価項目に分類したキーワード数を表した。

ハンドベル演奏体験１か月後と６か月後を比較すると、１か月後の調査でキーワード数が比較的多くみられた「音楽的技能」、「自分の行動特性」、「他者への配慮」のうち「他者への配慮」が６か月後に著しく減少した。また「ハンドベルの技能」の項目も３件減った。その他、「音楽的技能」、「音楽的な興味・関心」、「身体的能力」、「自分の行動特性」の４項目については微増した。「他者への配慮」が著しく減少した理由については次のように考えた。ハンドベルの演奏体験を始めた当初はハンドベルに対する興味・関心や、周りの仲間と音を役割分担し、協力しながら進める体制づくりに注意が向いていたが、授業が進み、演奏体験が増すにしたがい、次第にその環境に適応し、習慣化し、周りの仲間である他者への配慮は当然であり、さらに進み学生個々の役割の重要性を徐々に認識され、学生自身の各々の課題の取り組みに戻っていったのではないかと推測した。

また僅かに増加した「音楽的技能」では、以下のように推察した。練習曲の暗譜や16分音符のパッセージ、ハンドベルの様々な奏法、クワイアチャイムの奏法など、ハンドベル体験開始後約１か月では、難しい課題を、授業計画の立案の中で、授業毎の達成小節目標を設定し、段階的に展開した。楽曲は『A Joyous Ring』と『花のワルツ』を用いた。前者はハ長調４分の４拍子、ABA 形式82小節のシンプルな構成で、４分音符を中心に拍が明確かつ和音も多く用いられ、曲のテンポ感もつかみやすく、生き生きとした曲調により、基本的奏法が取り組み易い曲である。まずはこの曲から取り掛かることで、身体全体でリズムを体得することが可能になった結果、６か月でハンドベルに関する基本的技術の獲得が自覚できていると考察される。後者の『花のワルツ』は原曲はオーケストラ曲、ニ長調４分の３拍子、353小節の難易度の高い大曲である。とりわけ冒頭は、細やかでスピーディーなパッセージの部分が出現し、技術的にも困難さを有する箇所である。通常オーケストラでは、ハープパートとして演奏される。練習当初はその部分を後に回し、その先の取り組み易い箇所より練習を開始させ、徐々に技術的に難易度を上げて取り組んだ。冒頭部分を練習したのは、曲の最後の読譜後であったが、この時点で学生の音楽的技術はさらに進み、冒頭部分もスムーズに練習に入ることが出来た。このような練習手順も、音楽的技能の向上に有用であったと思われる。また、学生のベル割（アサイメント）では１人の学生が平均４個のハンドベルを担当するため、自分の音は限定される。したがって、担当する自分の音が出現する時以外は演奏されず、休符となる。学生が自分の担当する特定の音を凝視しながら曲全体を理解していく練習過程が、ハンドベルの演奏には不可欠になるため、音の高低やリズムを印象強く楽譜観察することが可能である。その結果、読譜力の向上につながったのではないだろうか。また、それぞれの学生が担当する音が限定されるため、学生が自分の担当する特定の高さの音を中心に耳を澄ますことが可能となり、それによって音感も身についたと考えられる。

「音楽的興味・関心」については、『花のワルツ』において、オーケストラの名曲をハンドベルに編曲されたものを楽曲として選曲した。チャイコフスキーの三大バレエ音楽『くるみ割り人形』の中の名作である。耳馴染みのある選曲を行ったことで、学生はクラシックを身近に感じ、オーケストラ原曲に忠実な、迫力やダイナミクスを本格的な醍醐味として体感できたものと推察される。名曲を、実際にハンドベル体験を通したことで更に音楽への興味関心が広がったのではないだろうかと考える。

「身体的能力」では、ハンドベル体験を継続するにしたがい、姿勢や筋力の向上を回答する学生が目立ってきた。低音部を担当する学生のハンドベルには、重量が３kgになる音もあり、片手で持つことさえも困難を生ずる。練習の過程で、腕の筋肉が盛り上がってきたと報告する者もあった。

「自分の行動特性」では、増加数値がもっとも高い結果となっている。自由記述のキーワードの中からも、ハンドベルを用いた音楽づくりを通して、学生各々が分担された音の役割を果たし、得られた達成感が動機づけとなり、集団の中の一員として、自分を肯定的に捉えることが出来たのではないかと考えられる。一人一人が集中力や自信を持つことで、技術面、精神面が向上し、音楽づくりとの相乗効果を生みだし、手ごたえのある作品に仕上がっていく実感も、ハンドベルならではの教育の成果と言えるのではないだろうか。加えて学生にとり，10月は短大生活最後の実習期間である。更に就職試験など、卒業後の進路決定を迎える時期と重なることも自己を見つめ直すタイミングが、自己肯定感の重要性を再確認することにも繋がったのではないだろうか。

「他者への配慮」では、６か月後にキーワード数が減少したが、むしろ６か月後の時点で「他者への配慮」は当然なこととして消化されたと考えたい。ハンドベルのように、集団での合奏スタイルであっても、同楽器で音程が異なる演奏形態は他にない。ピアノで例えるとするならば、鍵盤の１音１音を、学生がそれぞれ担うことと同じである。ひとりが欠けても音楽は成立しないのである。合唱であれば、それぞれパートに所属し、複数の人間によって、同じ声部を担当することが定型であり、

器楽合奏であれば、楽器による複数パートの集合体である。ハンドベルの合奏スタイルは特有の性質であるといえよう。よって、学生にとり、ハンドベルの体験当初は今までに経験のない合奏スタイルの立ち位置を自覚し、ひとりひとりの役割を果たすことで音楽が成立することに気持ちが向いていた時期であったと考えられる。他方、学生自身の周囲への関心は、６か月後にはハンドベルの演奏形態として定着し、その環境に馴染んだのではないかと推測される。なお各項目別に１か月後と６か月後のキーワード数の違いについて有意差検定（x^2検定）を行った結果、「他者への配慮」については、有意に減少することがわかった（$p<.05$）。

ハンドベル演奏への参加について

「ハンドベルを今後も続けたいと思う」と答えた学生は2013年５月調査 76.7%、最も多い理由は「面白い・楽しいから」で、回答した学生は 14 名であった。2013年10月調査では 70.7％であった。ここでも最も多い理由は、５月調査同様に「面白い・楽しいから」で回答した学生は17名であったが５月調査とは異なり、「皆が一つのことを協力する楽しさを知ったから」や「曲の一部でも、自分の音があると思うと楽しい」等、ハンドベル特有の理由を挙げている者もいた。この理由を記述した学生は、５月調査では、「ハンドベルを今後続けたいと思わない」と回答しており、その理由を、「難しい」や「自分の出す音が少ないから」と記述していたが、10月調査では演奏体験を継続する中で、協働の意欲に比例してハンドベルの楽しさや面白さがが増し、前述の理由を挙げたのではないかと考察される。

他方、「ハンドベルを今後も続けたいと思わない」と回答した学生は、５月調査では12.7%で、その理由は、「自分の出す音が少ない」、「少し難しい」、「疲れる」などであった。ところが10月の調査では24.2％で、その理由は「疲れる」、「まずはピアノを弾けるようにしたい」、「忙しくなる」、「＜卒業後＞やる機会がない」、「難しい」、「自分にはできない」、「やるより聴きたい」、「集団でやるから」などであった。１月の調査でハンドベル演奏の継続参加を望まない学生が増えた理由として、就職後は続けられない、もしくは演奏する機会があるかどうかわからない、あるいは職場の業務との兼ね合いで答えたように考えられる。

「わからない」と答えた学生は2013年５月調査では10.6%であったのに対し、同年10月調査では4.9％でと半減している。前述のように、「ハンドベルを続けたいと思わない」学生が増加していることを考え合わせると、学生達が卒業後の生活を考えて、ハンドベルを続けることが難しいと感じていることがうかがえる。それは、「機会があればやりたいが、やるかどうかはわからない」という理由の記述からも推察される。それ故にハンドベルの演奏体験は、学生時代ならではの貴重な機会となりうるのではないだろうか。

表３　ハンドベル演奏の継続参加について

アンケート実施月	思う	思わない	わからない
2013年５月	76.7%	12.7%	10.6%
2013年10月	70.7%	24.2%	4.9%

４．おわりに

ハンドベルの演奏は、終始立奏であり、正しくハンドベルを持つためには、身体のバランスを必要とする。故に姿勢の大切さへの気づきがみられた。また、運営管理面においては、事前準備から、事後の後片付けまでを通し、重量のあるベルケースの搬入搬出を、体力を使いながら行なうことが必須である。約８割が銅、約２割が錫の材質からなるハンドベルの取り扱いは常時手袋を着用し、貴重品として、細心の注意を払わねばならない。メンテナンスにおいては、定期的なベルケアを一斉に行う必要がある。こうしたベルの取り扱いや、ベル磨きの実践を積み重ねる中で、美しく磨かれたハンドベルの一個一個を手に取った学生は、その光沢の美しさに歓声をあげる程であった。このようなハンドベルを通した諸々の付随体験は、音楽以外においても、教育の成果をもたらしたと考察される。また、特に将来保育士や幼稚園教諭となる学生にとり、こうしたハンドベルの体験は卒業後に活きる重要な要素と思われる。しかしながら、在学中だからこそ、ハンドベルの演奏環境が整備される機会が与えられているのも現実ある。そうした状況をふまえ、在学中にハンドベルを体験できる機会は有意義であるといえる。ハンドベル体験の自己変容の中で、学生自身の行動特性の変化が著しいこともわかった。今後は、ハンドベル体験が、第三者を対象とした演奏発表体験を積むことで、更にどのような自己変容があるかついても検討を進めたい。

謝辞

今回の研究を進めるにあたり、堅田明義先生から、多大なるご指導、ご助言を頂戴した。ここにあらためて、敬意と感謝の意を表する。

文献

1) ドナルド・E・アルレッド（1993）ハンドベルリンガーズと指導者のための手引き。共同音楽出版社　東京、p3
2) 下田和男(1995)ハンドベルの魅力。共同音楽出版社　東京、p50。
3) 佐藤敦子(1999)保育者養成機関におけるハンドベルの導入、第 52 回日本保育学会、発表要旨集、p35

委員会受理日　2014.3.10

中部学院大学・中部学院短期大学部　研究紀要第15号(2014) 35-40

Self-Alteration in College Student by Ringing on Handbells

Yasuko　OKADA

Abstract：This study was to clarify the association between the handbell performance experience and the students' self-assessment/self-transformation. The research was conducted after the handbell performance experience for the nursery teachers and the sophomores in the kindergarten teacher training course. The survey content was twofold: (1) limited questions regarding self-assessment and (2) free descriptions about self-transformation. With regard to (1), self-assessment showed an improvement in each area of "concent ration", "cooperativeness", "sense of responsibility", and "musical ability". On the other hand, many students mentioned "handbell skill", "musical skill", "physical ability", "consideration to others" as well as transformation of "interest in music" and "my own behavior properties" with regard to (2). In addition, when examining the factors that promoted these transformations, some of them were considered to be educational results that were unique to handbell.

Keywords：handbells self-transformation, college student, behavior properties, self-assessment